

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22390447

研究課題名(和文)新興住宅地の向老期世代を対象とした“地域への愛着”を育む健康増進プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of Health Promotion Program for Pre-Elderly Population in New Residential Areas to Enhance "Attachment to the Local Community"

研究代表者

大森 純子(Omori, Junko)

東北大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：50295391

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：大都市近郊の新興住宅地に居住する向老期世代を対象とした“地域への愛着”を育む健康増進プログラムを開発した。“地域への愛着”の概念について、既存の文献とインタビューから明らかにした。この概念分析の結果をもとに、“地域への愛着”を測定する尺度を作成した。“地域への愛着”の4つの構成概念を骨子にプログラムを考案、実施、評価した。プログラムの直前と直後、終了後1月、3ヵ月、6ヶ月の時点まで、“地域への愛着”の変化について量的・質的に経過を追った。その結果、プログラムによる介入の効果を確認できた。今後の課題として、プログラムの有効な要素を抽出し、汎用性を備えた方法論の確立の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：We developed a health promotion program for the pre-elderly population living in peri-urban new residential areas to enhance their “attachment to the local community.” We started by elucidating the concept of “attachment to the local community” through existing literature and interviews. The results of this concept analysis helped us prepare metrics for measuring such attachment. The four constructs of “attachment to the local community” formed the basis for the development, implementation and assessment of the program. We monitored quantitative and qualitative changes in such attachment by making measurements directly before and after the program, as well as at the end of the first, third and sixth month from the completion of the program. The measurement results suggested the effectiveness of the program’s intervention. The results also indicated some remaining issues including the need to identify effective elements of the program and establish a generally applicable method.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：地域への愛着 健康増進 向老期 新興住宅地 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

近年、健康を高める人々の関係性や社会的な結びつきといった社会資本や社会関係資本、人間関係資本などと訳されるソーシャル・キャピタル (Social Capital 以下 SC) の概念が注目されている。SC と健康に関する多数の知見の集積から、近隣地域への愛着が介在することにより健康行動や健康レベルに変化が起り、その恒久性が担保されるとのモデルも示された¹⁾。

中高年は、縮小した社会関係を新たに再構成するニーズが高まる時期であるが、実際は同年代の知人や友人をつくる機会が限られ、新しい社会関係を醸成することが困難であるという指摘もある²⁾。また、向老期では、ボランティアなどの社会活動に参加することを通じて幸福感などの心理的な陽性の効果が得られ、今後このような生き方を促進する意義も示唆されている³⁾。

しかし、個人と地域全体の健康増進をねらう保健事業については、地域づくりとして多数の実践報告はあるものの、この事象の理解は不十分であるため、エビデンスに基づく効果的な実践には至っていない。また、向老期に限定した健康増進に関する研究や、個人変容と社会変容を同時にねらった健康増進プログラムの開発などの実践研究は、わが国では未だ希少である。

長寿を生きる時代の人々の健康観や生活の質 (地域社会における安寧) を重視した公衆衛生活動として、個人の認識や行動の変化 (個人変容) と地域の力量形成 (社会変容) を同時にねらう実践研究が必要と考える。

2. 研究の目的

本研究は、新興住宅地に居住する向老期世代を対象とした“地域への愛着”を育む健康増進プログラムを開発することを目的とする。

全国の大都市近郊に造成開発された新興住宅地では、団塊世代の高齢期への移行に伴い、街全体の高齢化とそこに居住する高齢者の生活の質に関わる問題の深刻化が予測される。新興住宅地に居住する向老期世代の“地域への愛着”を意図的に育むことが可能になれば、老いに対する前向きな志向や加齢による身体・精神的側面の変化と折り合いをつけた健康認識、社会参加による QOL の向上など個人の健康増進 (個人変容) と同時に、社会関係の醸成を意図的にねらうことが可能となり、住民間の気遣い合いや支え合いなどの癒しの力や問題解決力を高め、地域の力量形成 (社会変容) も見込めると考える。

3. 研究の方法

目標 1 から 5 まで、段階的に研究を進めた。

〔目標 1〕健康増進プログラムの基盤となる

“地域への愛着”の概念を分析し、定義する。

〔目標 2〕構成概念の検討と評価ツールの作成のために“地域への愛着”尺度を開発する。

〔目標 3〕“地域への愛着”に影響する関連要因、QOL との関連を検討する。

〔目標 4〕“地域への愛着”の構成概念を骨子にプログラムの目標や内容等を試案する。

〔目標 5〕“地域への愛着”を育む健康増進プログラムを実施、評価する。

5年間を通して、“地域への愛着”の概念を明らかにし、その概念を測定する尺度を開発した。次いで、“地域への愛着”の構成概念を骨子にプログラムを考案、実施し、量的・質的にその効果を評価した。

目標 2～5 は、研究代表者の職属機関と協働自治体 (千葉県白井市) との共同実践研究事業として実施した。

統計解析には、IBM SPSS statistics 21 を用いた。

4. 研究成果

〔目標 1〕“地域への愛着”の概念分析

➤ 国内外の関連領域における文献にて概念的特徴、および概念的課題について検討した。

➤ 居住地の社会的な活動を携っている研究参加者 9 人にインタビューを行った。

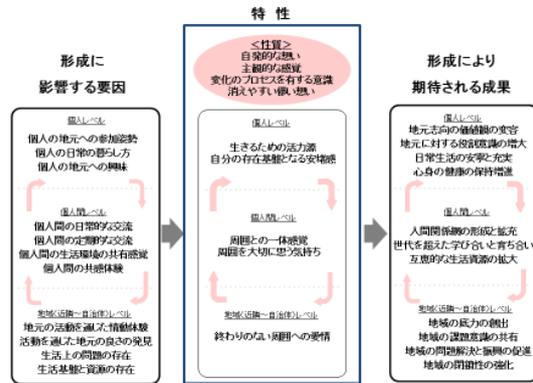
➤ 概念の特性・その形成に影響する要因・形成により期待される成果の 3 つの枠組みを用いて、データの意味内容に基づきカテゴリを抽出した。

➤ カテゴリ間の関係に着目し、個人レベル・個人間レベル・地域 (近隣～自治体) レベルの 3 つの次元を組み込んだ概念の全体構造を検討した。

➤ “地域への愛着”の定義づけを行なった。

1) 概念の特徴：“地域への愛着”は、きっかけがあればもつことができる＜自発的な想い＞であった。今ここにいる自分を起点に、自分と他者、他者と共有している物理的環境や自然環境、これらを網羅した生活経験により、個人の内面に映し出される地域に対する＜主観的な感覚＞であり、自分と他者との間、自分と地域との間に拡大していく＜変化のプロセスを有する意識＞でもあった。しかし、その意識は、人間関係と結びついているために繊細であり、良好な関係性を保つ努力を怠ると縮小する＜消えやすい儚い想い＞でもあった。各次元のカテゴリは、相互に作用し合い、常に個人の内外に変化をもたらす関係にあった。“地域への愛着”の形成が進むと、地域を志向した行動が促進され、形成により待される成果が拡大・充実するプロセス構造をもつ概念であった。

2) 概念の定義：“地域への愛着”とは「日常生活圏における他者との共有経験によって形成され、社会的状況との相互作用を通じて変化する、地域に対する支持的意識であり、地域の未来を志向する心構えである」と定義することができた。



【目標2】【目標3】“地域への愛着”尺度の開発、“地域への愛着”の関連要因・QOLとの関連の検討

- 概念分析の結果（属性、先行因子、帰結）に基づき、構成概念と項目を検討し、質問紙を作成した。
- 住民 1,000 人（層化無作為抽出）を対象に自記式質問紙調査（郵送法）を行った。
- 因子分析により、構成概念および概念を測定する項目を検討した。
- “地域への愛着”に関連する要因、健康関連 QOL との関連について検討した。

1) 尺度の開発

(1) 調査内容：“地域への愛着”の概念分の結果から、概念の特性のカテゴリをもとに 5 つ構成概念を設定、構成概念ごとにアイテムプールを作成した。妥当性の検討を重ね、1 構成概念ごとに 6 つ、計 30 項目を設定した。
 (2) 分析方法：30 項目について、項目分析、因子分析（主因子法・Promax 回転）、内的整合性の検討（Cronbach's α）を行った。

因子名	I	II	III	IV
生きるための活力の源	0.87	-0.07	0.05	-0.04
人とのつながりを大切に思う思い	0.02	0.90	0.02	-0.22
自分らしくいられるところ	-0.01	-0.05	0.95	-0.06
住民であることの誇り	0.05	-0.05	-0.15	0.88

(3) 結果：23 項目によって構成される 4 因子構造の尺度を開発した。尺度は、第 I 因子“生きるための活力の源”（5 項目・20 点満点）、

第 II 因子“人とのつながりを大切に思う思い”（8 項目・32 点満点）、第 III 因子“自分らしくいられるところ”（5 項目・20 点満点）、第 IV 因子“住民であることの誇り”（5 項目・20 点満点）となった。

2) 関連要因の検討

(1) 調査内容：形成に影響する要因のカテゴリをもとに関連要因の変数を設け、“地域への愛着”尺度の 4 因子との関連を検討した。関連要因の変数は、基本属性（性別、年齢、疾患の有無、世帯構成、住居形態等）、社会的活動の状況（仕事の有無と種類、勤務地、自治会や町内会等の加入の有無、1 年以内の町内会等の活動の参加の有無、地域のサークルやグループでの活動の経験）、地域とのかかわり（地域住民との付き合いの程度、望ましいと思える地域住民との付き合いの程度）、ソーシャル・サポート（Zimet GD らの「ソーシャル・サポート尺度」日本語版の下位尺度（大切な人、友人）⁴⁾）とした。

(2) 分析方法：“地域への愛着”尺度の 4 因子それぞれの得点と、各変数との関連性について、t 検定、一元配置分散分析による平均値の比較、Pearson の相関係数の算出を行い、検討した。

(3) 結果：“地域への愛着”尺度の 4 因子すべてに、住居形態、勤務地、自治会等への加入の有無や自治会・町内会、および地域でのグループの活動、地域住民との付き合いの程度と考えが関連していた。その土地に生活や仕事の基盤があるか、地域の住民同士の関わりがどの程度あるかが“地域への愛着”に深く関わることで推察された。

第 II 因子は、特に各要因との関連が強く、“人とのつながりを大切に思う思い”が様々な

生活背景によって育まれていることが推察された。“地域への愛着”は、個人の持つ特性と共に、地域内での近隣との個々のつながりや自治会・町内会活動を通じた地域レベルで

変数	第 I 因子	第 II 因子	第 III 因子	第 IV 因子
性別	0.17±0.16	0.02	0.21±0.14	0.14±0.13
年齢	0.12±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
世帯構成	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
住居形態	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
仕事の有無	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
勤務地	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
自治会等の加入	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
地域の活動参加	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
地域とのかかわり	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13
ソーシャル・サポート	0.11±0.17	0.23±0.13	0.14±0.17	0.15±0.13

の活動の積み重ねにより醸成が図られると考えられた。

3) QOL との関連の検討

(1) 調査内容：基本属性、“地域への愛着”尺度（第 I～IV 因子）、QOL の変数には健康関連 QOL 尺度（SF-8）⁵⁾を使用した。

(2) 分析方法：SF-8 の 8 つの下位尺度は、

国民標準値に基づいたスコアリング法を用いてスコア化した。スコア化した各項目、身体的サマリースコア、精神的サマリースコアを従属変数とし、“地域への愛着”尺度の4つの因子を投入、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。多重共線性は、独立変数間の相関係数と VIF (Variance Inflation Factor) の値にて判断した。

(3) 結果：健康関連 QOL (SF-8) のうち7つの健康概念、および精神的サマリースコアとの関連が確認された。地域への愛着の形成が精神面での QOL につながり、健康の維持・増進に寄与する可能性が示唆された。また、SF-8 の各項目は比較的、“地域への愛着”尺度の第IV因子と関連があり、体の痛みや心の健康を含めた全体的な健康観は、住民として地域のことを誇りに思う気持ちと関連しながら、地域への関わりの価値付けに影響する可能性が考えられた。

項目	平均値	標準差
身体機能:PF	48.87±3.36	9.77
身体的健康感(身体):RP	49.59±7.52	12.94
体の痛み:BP	50.26±6.70	12.94
身体的健康感(心):GH	48.66±6.92	12.94
疲労:VT	48.66±6.92	12.94
社会生活機能:SF	49.31±6.49	12.94
社会生活機能(精神):RE	48.66±6.92	12.94
心の健康:MH	49.92±7.33	12.94
精神的サマリースコア:MCS	48.66±6.92	12.94

項目	PF	RP	BP	GH	VT	SF	RE	MH	MCS
第1因子	β=0.10, p<0.021	β=0.10, p<0.014							
第2因子	β=0.10, p<0.021	β=0.10, p<0.014							
第3因子	β=0.10, p<0.021	β=0.10, p<0.014							
第4因子	β=0.10, p<0.021	β=0.10, p<0.014							

【目標4】【目標5】『地域への愛着を育むプログラム』の考案と実施・評価

- “地域への愛着”の4つの構成概念を骨子に、『地域への愛着を育むプログラム』の目標とキーコンセプトを設定した。
- 全4回のプログラムの展開枠組みをもとに、各回の具体的な方法を検討した。
- 予防的介入ニーズのある地域を選定し、個別通知を通じて参加者を募った。
- 参加者の協力(50~60歳代の男女20名)を得て、プログラムを実施した。
- プログラムの直前、直後、1・3・6ヵ月後まで、参加者の認識や行動の変化を調査し、プログラムの効果を評価した。

1) プログラムの考案
4つの構成概念と関連要因をもとに、各回に1つずつ構成概念をキーコンセプトとして設定し、全4回の『地域への愛着を育むプログラム』を考案した。内容や形式、時間配分等は、地域の特性や資源を考慮、活用しながら、小グループによる語り合いや参加者全員の交流を促すように工夫した。

2) プログラムの実施
予防的な介入ニーズの高い小学校区(10~20年後に急速な高齢化が予測される20年前に大規模造成開発された中層・高層住宅が並ぶ分譲住宅地)を対象地域に選定し、50~60

歳代の住民20名から研究参加を得た。

東北大学大学院医学系研究科・白井市健康福祉部健康課共同実践研究事業『〇〇(地区名)を好きになってますます元気になろう!』

回	タイトル	目標とキーコンセプト(構成概念)とキーワード	形式
第1回	〇〇に住むわたしたち これからよろしくご近所さん	目標:人とのつながりを大切にしたいを共有する キーコンセプト:人とのつながりを大切にしたい キーワード:導入、交流、信頼関係の構築	グループワーク 講義 全体交流
第2回	わたしの〇〇暮らしとスポット 〇〇のここがいいね!	目標:生きるための活力の源を見出す キーコンセプト:生きるための活力の源 キーワード:楽しみ、生きがい	グループワーク 全体交流
第3回	わたしたちの〇〇暮らしとスポット 〇〇には眠っている価値がある	目標:自分らしくいられるところを見出す キーコンセプト:自分らしくいられるところ キーワード:自分の居場所、安心感	グループワーク 全体交流
第4回	〇〇の未来と私の未来を語ろう ステキなまちにはつぎがある	目標:住民であることの誇りを共有する キーコンセプト:住民であることの誇り キーワード:自分と地域の未来	グループワーク 講義 全体交流

時期:2014年8月23日~9月27日
時間:土曜13:00~15:00(以降は自由解散)
15:30まで茶話会スペースを設けた。
場所:地区内のコミュニティセンター
参加者:20名(男性7名・女性13名)
運営スタッフ:保健師3名・市職員1名・講師1名(写真家)・研究班(固定メンバー)6名+(必要に応じて)1~5名

3) プログラムの評価

(1) データ収集の方法

- ①質問紙調査:プログラム開始の直前、最終回終了直後に会場にて、日常生活における変化について1・3・6ヶ月後に郵送法にて実施した。介入前後の変化を測定する尺度には、“地域への愛着”尺度を用い、近隣地域に関する認識の変化に関する自由記載欄も設けた。
- ②グループインタビュー:最終回終了後、会場にてグループ毎にインタビューを行った。

(2) 分析方法

- ①量的データ:プログラム開始直前から終了後6ヶ月までの5時点の“地域への愛着”尺度の各因子および合計点の変化の比較は、反復測定による1要因の分散分析を行った。さらに、年齢、参加回数による主効果および交互作用の確認を行った。年齢は5歳間隔で、4群を設定して比較した。
- ②質的データ:インタビューの録音からトランスクリプトを作成、内容分析を行った。自由記載をテキストデータにし、内容分析を行った。地域への愛着の変化、および関連する日常生活における変化の意味内容を抽出した。

(3) 分析結果

①量的データ“地域への愛着”の変化
“地域への愛着”尺度は、第I因子“生きるための活力の源”、第II因子“人とのつながりを大切にしたい”、第III因子“自分らしくいられるところ”、第IV因子“住民であることの誇り”からなる。本分析における各因子のCronbachの信頼係数は、第I因子0.89、第II因子0.89、第III因子0.87、第IV因子0.90であった。

分散分析の結果、第Ⅰ因子は調査時期の主効果は、 $F(4, 72)=3.29$ 、5%水準で有意であった。第Ⅱ因子は $F(4, 68)=4.34$ で1%水準、第Ⅲ因子は $F(4, 76)=3.38$ であり、5%水準で有意であった。第Ⅱ因子では、直前と3ヶ月後、第Ⅲ因子では直前と直後で平均値に有意差が認められた。合計点は0.1%水準で有意であり、直前と直後、3ヶ月後、6ヶ月後で平均値の差があった。

次いで、“地域への愛着”尺度と各要因による交互作用を検討した。年齢を51歳から5歳間隔で4群に分け、プログラム参加による効果を確認した。その結果、地域への愛着尺度の第Ⅰ因子の得点への調査時期による主効果は5%水準で有意であったが、調査時期と年齢区分による有意な交互作用は認められなかった。第Ⅱ因子も同様で、調査時期の主効果は1%水準で有意であったが、交互作用は有意ではなかった。第Ⅲ因子、第Ⅳ因子、合計点も同様の結果であった。

プログラムへの参加回数に関しては、“地域への愛着”尺度の第Ⅰ因子と第Ⅱ因子は、調査時期と参加回数による主効果、交互作用ともに有意ではなかったが、第Ⅱ因子では、調査時期の主効果は5%水準、調査時期と参加回数の交互作用も5%水準で有意であった。第Ⅳ因子は、調査時期の主効果が1%水準で有意であった。合計点は、調査時期と参加回数の交互作用が5%水準で有意であった。

表1 プログラム参加前後の地域の愛着尺度の変化

	直前	直後	1ヶ月後	3ヶ月後	6ヶ月後	Mauchlyの球面性検定	F値	有意確率	
第Ⅰ因子	n=19	13.4±3.2	15.3±2.4	14.7±2.4	14.8±2.5	15.2±3.0	0.380	3.29	0.016
第Ⅱ因子	n=18	22.1±4.7	22.8±5.0	22.6±5.4	24.5±4.6	23.9±4.8	0.741	4.34	0.003
第Ⅲ因子	n=20	14.8±3.4	16.6±3.2	15.7±2.7	16.1±2.9	16.6±3.2	0.082	3.38	0.013
第Ⅳ因子	n=18	15.6±2.8	17.2±2.7	16.2±2.9	16.9±2.8	16.5±2.7	0.008	2.76	0.052
合計点	n=17	66.4±11.8	71.5±10.4	69.7±11.5	73.4±10.9	73.1±12.5	0.424	6.91	p<0.001

多重比較:Bonferroni *p<0.05, **p<0.01

注)Mauchlyの球面性検定でp<0.05の場合は、Huynh-Feldtの検定結果を補正

②質的データー日常生活における変化

※文中の「斜体ゴシック」は実際の記述を示す。

最終回のプログラム終了直後のグループインタビューでは、<健康への確信><地域交流の機会><未来への希望><新たな意識の広がり>という思いがメンバー同士の語り合いの中で表出された。

自由記載の内容から、プログラムへの参加の動機は「ほとんど住居地のことを知らず、将来を考えて自分の住むところをもっとよく知ろうと思い参加した」「友人、知人が出来ればうれしいかな、と思い参加した」など、地域について知りたい、地域に知り合いを作りたい、社会参加のきっかけにしたい、プログラムの内容に興味を持った等であった。終了後には、「健康な毎日を送ることは、現在の居住地を含めた環境が大切であることを再確認した」「この地域の人たち

と顔見知りになれて、親しみを感じられるようになった」「地域の人々とのコミュニケーションの大切さ、喜びを痛感した」と、地域の良さを感じ、知り合いができ、この地域でこれからを前向きに生きたいと思うようになったとの感想がみられた。

1か月後には、「すぐ近くに新しいお友達が出来てお付き合いが楽しかった」「他人のまち的なところがあったが、回を重ねるごとに親しみを感じられるようになった」「参加者と会を作り、定期的に会合を持つようになって良かった」「自分と同じように老後をここで過ごそうと考えている人が結構大勢いることがわかってよかった」と、参加者による自主グループが結成され、定期的に会う機会ができ、人とのつながりを実感し、その交流から楽しみや安心感を得ていた。「少しずつ自分ができることを探して参加したい」「他人にも積極的に声を掛けていきたい」など、地域に関わろうという意識がみられた。

3か月後には、「少しずつ外出するようになった」「OB会への参加など楽しみが増えた」「参加してから地域の活動などに積極的に参加したいと思った」「よい街、好きな街として安心して生活している、満足して暮らしていけると思う」と、自主グループとしての活動が確立し、地域への親しみや安心感が増大し、プログラムへ参加体験が他の地域の活動への参加のきっかけとなっていた。「地域のために役立つことがあればしていきたい」「楽しみながらもっと友人を作ってボランティア活動がしたい」と、仲間と一緒に地域に貢献したいという想いも深まっていた。

6か月後には、「コミュニケーションの大切さを再確認でき、地域を大切にしたいという気持ちになった」「積極的ではなかったが、歴史を知ったことでこの土地への愛着が深まった」「グループが誕生し、徐々に親しさが増し、バッテリー会ったら気軽に声を掛けあう人が何人もできて楽しい」「プログラムに参加して前向きな考え方になった」と、自主グループの活動が継続し、地域について再確認するなかで、積極的な愛着が育まれていた。これからの地域とのかかわりについて、「今は仕事をしていて出来ないが、5年先のために少しずつでも地域のいろんな活動に参加したい」「どうにかして一人暮らしの人を外に連れ出したい」という積極性が増す一方で、「今のままでよい」「人とは程よい距離で心地よく暮らしたい」「今後はわからない」といった回答もあった。

総括

以上の結果から、日常生活における経過を追うことで実際の変化を把握できた。新興住宅地に居住する50~60歳代の参加者のニーズに相応しい内容であったことから、プログラムへの参加を通じて、地域の良さを見直し、地域への愛着を育む仲間を得て、これからの人生をこの地域で前向きに生きていこうと

願うように変化したと考えられる。このことは、“地域への愛着”と4つの構成概念である、“生きるための活力の源”、“人とのつながりを大切にする思い”、“自分らしくいられるところ”、“住民であることの誇り”のそれぞれの数値的な変化にも示された。このことから、介入プログラムの評価として、一定の効果を確認することができた。

さらに、日常生活における参加者個人の経験と自主グループとしての活動の様相との関係について検討する必要性も示唆された。

今後は、方法論の確立のために、本研究において開発したプログラムについて、“地域への愛着”の形成に有効に作用した要素を抽出し、メソッドとして汎用性を高めることが課題である。

引用文献

- 1) Carpiano RM. 健康に影響を及ぼす近隣の実体的・潜在的なリソース. Kawachi I, Subramain SV, Kim D, ed.: Social Capital and Health, 2008. 藤澤由和, 高尾総司, 浜野強 監訳: ソーシャル・キャピタルと健康, 東京: 日本評論社, 2008; 137.
- 2) 菅原育子, 片桐恵子. 中高年者の社会参加活動における人間関係, 親しさとその関連要因の検討. 老年社会科学 2007; 29(3): 355-365.
- 3) 中原純, 藤田綾子. 向老期世代の現在の行き方と高齢期に望む生き方の関係. 老年社会科学 2007; 29(1): 30-36.
- 4) 岩佐一, 権藤恭之, 増井幸恵, 他. 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年を対象とした検討—. 厚生指標 2007; 54(6): 26-33.
- 5) 福原俊一, 鈴嶋よしみ. SF-8 日本語版マニュアル: NPO 健康医療評価研究機構, 京都, 2004.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

大森純子, 三森寧子, 小林真朝, 小野若菜子, 安齋ひとみ, 高橋和子, 宮崎紀枝, 酒井太一, 齋藤美華. 公衆衛生看護のための“地域への愛着”の概念分析. 日本公衆衛生看護学会誌 2014; 3(1): 40-48. (査読有)

〔学会発表〕(計5件)

・大森純子, 三笠幸恵, 三森寧子, 他. ワークショップ: 地域の底力の礎“地域への愛着”を育む実践—遠慮がちなソーシャル・キャピタルの発掘と育成—, 第3回日本公衆衛生看護学会学術集会, 兵庫県神戸市(神戸国際会議場), 2015年1月10日-11日

・酒井太一, 大森純子, 高橋和子, 他: 向老期

世代の“地域への愛着”を測定する尺度の開発 (第1報). 第2回日本公衆衛生看護学会学術集会, 神奈川県小田原市(国際医療福祉大学), 2014年1月12日-13日

・高橋和子, 大森純子, 酒井太一, 他: 向老期世代の“地域への愛着”を測定する尺度の開発 (第2報). 第2回日本公衆衛生看護学会学術集会, 神奈川県小田原市(国際医療福祉大学), 2014年1月12日-13日

・三森寧子, 高橋和子, 大森純子, 他: 向老期世代の“地域への愛着”を測定する尺度の開発 (第3報). 第2回日本公衆衛生看護学会学術集会, 神奈川県小田原市(国際医療福祉大学), 2014年1月12日-13日

・大森純子, 小林真朝, 安齋ひとみ, 他. “地域への愛着”概念分析 ハイブリッド・モデルを用いて. 第1回日本公衆衛生看護学会学術集会, 東京都荒川区(首都大学東京), 2013年1月9日.

6. 研究組織

(1)研究代表者

大森 純子 (OMORI, Junko)
東北大学大学院医学系研究科・教授
研究者番号: 50295391

(2)研究分担者 —

(3)連携研究者

三森 寧子 (MITSUMORI, Yasuko)
聖路加国際大学看護学部・助教
研究者番号: 70633396

小林 真朝 (KOBAYASHI, Maasa)
聖路加国際大学看護学部・准教授
研究者番号: 00439514

小野 若菜子 (ONO, Wakanako)
聖路加国際大学看護学部・准教授
研究者番号: 50550737

高橋 和子 (TAKAHASHI, Kazuko)
宮城大学看護学部・教授
研究者番号: 00315574

酒井 太一 (SAKAI, Taichi)
順天堂大学保健看護学部・講師
研究者番号: 50363734

宮崎 紀枝 (MIYAZAKI, Toshie)
佐久大学看護学部・准教授
研究者番号: 50349172

安齋 ひとみ (ANZAI, Hitomi)
目白大学看護学部・教授
研究者番号: 40322341

齋藤 美華 (SAITOH, Mika)
東北大学大学院医学系研究科・講師
研究者番号: 20305345

田口 敦子 (TAGUCHI, Atsuko)
東北大学大学院医学系研究科・助教
研究者番号: 70359636